

花木のコンテナ栽培に適した用土と施肥方法

【要約】 シャリンバイ、トベラ、ベニカナメモチ及びアベリアのコンテナ栽培ではマサ土、ボラ土及びピートモスを2：1：2の割合で混合した用土を用いると、生育が優れる。施肥は実生苗のシャリンバイではI B化成を4g～6g、トベラではI B化成を6g、挿し木苗のベニカナメモチ及びアベリアではI B化成を8g施用すると移植後の生育が優れる。

園芸研究所・野菜花き部・花き花木研究室					連絡先	092-922-4111	
部会名	園 芸	専 門	栽 培	対 象	花き類	分 類	普及

【背景・ねらい】

花木のコンテナ栽培は、植栽後の活着とその後の生育が良好なこと、植栽時期を選ばないこと、短期間に大量供給が可能なこと、出荷に際し根巻き等を必要としないこと、などの利点があるため需要が増大している。しかし、コンテナ栽培に適する樹種の選定、容器の形状や大きさ、施肥方法、用土の配合割合等については試行錯誤で行われているのが現状である。そこで、花木のコンテナ栽培に適した用土と施肥方法について明らかにする。

【成果の内容・特徴】

- ①実生苗のシャリンバイ、トベラ及び挿し木苗のベニカナメモチ、アベリアはマサ土、ボラ土、ピートモスを2：1：2の割合で混合した用土を用いると、移植後の生育が優れ、樹高が高くなる（図1）。
- ②施肥は、シャリンバイではI B化成を4号鉢当たり4～6g、トベラでは6gを2回に分けて置肥すると、樹高が高くなる（図2）。ベニカナメモチはI B化成を8g2回に分けて施用すると、樹高は高く、分枝数も多くなる。また、アベリアはI B化成8gの2回分施で長枝の生育が旺盛となる（図3）。

【成果の活用面・留意点】

- ①花木のコンテナ栽培技術資料として活用する。
- ②ピートモスは、繊維が長く排水のよいものを使用する。

[具体的データ]

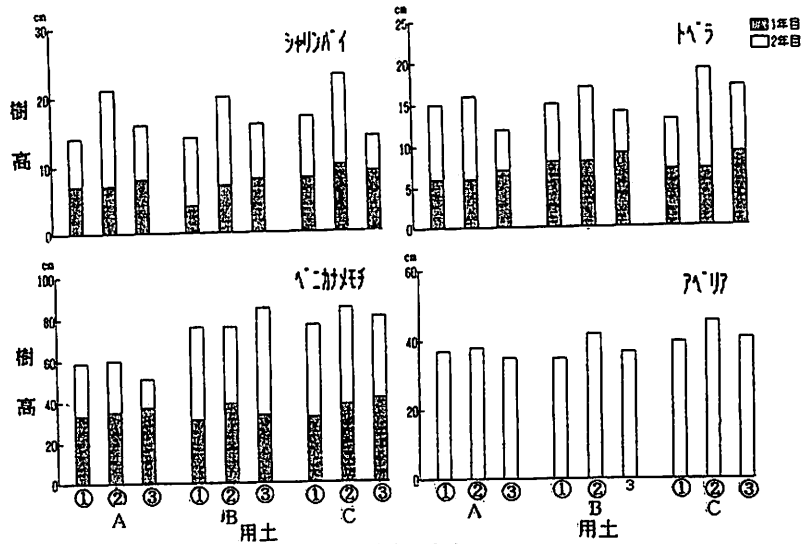


図1 用土の種類が樹高に及ぼす影響 (平成4年)  
 注) ①試験区の内容 ①-2:1:1 A-マサ土:ボラ土:もみがら  
 ②-2:1:2 B-マサ土:ボラ土:牛ふんもみがら堆肥  
 ③-3:0:2 C-マサ土:ボラ土:ピートモス  
 ②移植は平成4年6月、調査は平成4年12月(1年目)平成5年6月(2年目)

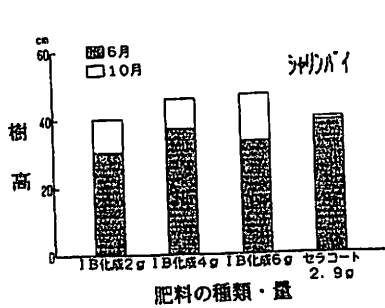


図2 肥料の種類・量が実生苗の生育に及ぼす影響 (平成3年)  
 注) ①施肥量は平成3年8月、4年6月年2回の合計 (セラコートは平成3年8月の1回施肥)  
 ②用土はマサ土:ボラ土:ピートモス=2:1:2

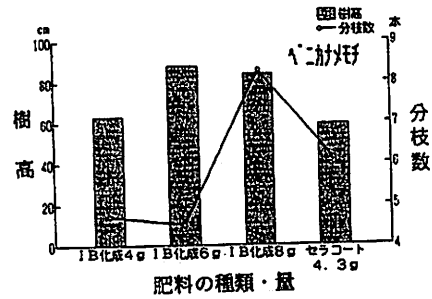


図3 肥料の種類・量が挿し木苗の生育に及ぼす影響 (平成4年)  
 注) ①施肥量は平成4年6月、10月年2回の合計 (セラコートは平成4年6月の1回施肥)  
 ②用土はマサ土:ボラ土:ピートモス=2:1:2

[その他]

研究課題名: 用土と施肥方法

予算区分: 経常

研究期間: 平成4年度(平成3~4年)

研究担当者: 坂井康弘、小林泰生、谷川孝弘

発表論文等: 平成3~4年度園芸研究所野菜花き部花き花木研究室試験成績書